

4. 各時代の重要場面“このエピソード”で楽しく覚える！

⑥ 武家政治―重要場面のエピソード

村上浩一

各時代の項目順から類推して、ここでは「武士の起こり」というテーマで書いていくことにする。

一、「私腹を肥やす国司」

「尾張国郡司百姓等解文」という10世紀末の古文書によると、中央政府から地方へ赴任した国司を農民が訴えたというのです。理由はというと、要するに国司が私腹を肥やすというのです。例えば、税を高くとったり、税の未納分に多くの貸し付けをして、利息をかせめ取ったりするわけです。他にも、その国司の従者である郎党までもが私

腹を肥やすというのです。その解文は

㊦箇条にもおよびます。その国司とは

藤原元命という者で、結局は郡司や百姓らによって解任させられたようです。

988年のことです。

一方、『今昔物語集』によると、国司の貪欲さがわかる話があるのですよ。

信濃の国司、藤原陳忠は任期満了に伴い都へ上る途中、人馬もろとも橋から落ちてしまいます。陳忠は運よく途中の枝にかかり助かりました。一方の手には縄を、もう一方の手にはヒラタケを持っていたそうです。そして、助けられた国司は郎党らに言ったそうです。

「実は大損をした、まだたくさんあったのに。」と。「本当に大損でしたな。」

と笑う郎党らに、「馬鹿を言うな。国司は倒れても土をつかんで立ち上がれないではないか。」と言って笑ったというように語り伝えてあります。

このように、国司の貪欲さからでしょうが、10世紀末から11世紀初頭には多くの国司が訴えられているようです。こうして、地方政治が乱れていたのです。地方では、治安維持あるいは郡司や地方豪族たちの自衛手段として、その子弟に武芸を磨かせ、次第に彼らが「武士」として起こっていつ

たのでした。

二、弓矢の習い

その武士が最も意識していたのが「弓矢の道」「兵の道」というものでした。いろいろな絵巻物にも、武士たちが「弓矢取る身の習い」として、常日頃から訓練をしていました。例えば、「犬追物」といって、犬を放して墓目の（鏃をつけていないので傷をつけない）矢で犬を射る練習がありました。又、「笠懸」といって、塚（的の背後に築いた山形の土）に笠をかけて遠くから矢を射る練習もありました。

ここに武士道の源流があるわけです。『宇治拾遺物語』によると、こんな逸話が残っていますよ。壱岐守宗行のある郎党が、訳あって新羅の国へ渡りま

その男は「弓矢に携わる者」の一人として、虎退治を請け負い、わが命を捨てて虎と直面します。そして、鏃のよ

うな鏃に毒を塗った一尺の矢を弓で弾きました。ついに虎は倒れ、新羅の人々はこの日本の兵に怖じ氣ついたということ

です。このように、武士たちは、日々武芸を鍛え、主君のためには我が身も捨てて鍛練していたのでした。さらには、忠節、武勇、信義、礼節、質実、孝行等々の道徳心が「弓矢取る身の習い」として形成されていきました。

ところで、この時代にはたくさん

子どもたちに自由に歴史を語らせると

いう方法もいいのではないかと考える。例えば、『一遍聖絵』には、「筑前の武士の家」という場面があるが、ここには主殿、離れ、馬小屋、門、板と竹による塀、武士の姿等々が描かれている。

しかも、主殿ではさも聞こえてくるかのようなタッチで、会話シーンが描かれている。『法然上人絵伝』にも「美作の武士の家」というのが描かれており、ここにも武士の館や農民の家等々があるので、前のと比較してみるのもいいだろう。その他にも、『男衾三郎絵詞』

（笠懸の絵）、『犬追物図屏風』（犬追物の絵）、等々がある。このような絵巻物には、当時の様子が生き生きと描かれており、子どもたちも自由に想像を膨らませていくことで、歴史の場面が理解されていくのではないかと考える。（熊本市出水Ⅱ出水南小学校教諭）